



令和8年度 果樹情報 第4号

(令和8年5月7日)

果樹の開花、防霜対策と病虫害防除対策
福島県農林水産部農業振興課



1 気象概況 (4月下旬、果樹研究所)

平均気温は、第5半旬が12.9℃で平年並、第6半旬が13.7℃で平年より0.5℃低く経過しました。
この期間の降水量は8.5mmで平年比31%と平年より少なくなりました。日照時間は84.9時間で平年比110%と平年より多くなりました。

2 土壌水分 (4月30日現在、果樹研究所)

4月30日時点の土壌水分 (pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水) は、深さ40cmで2.3、深さ60cmでは2.1となっており、適湿状態です。

3 発育状況 (5月1日現在)

(1) もも (農業総合センター果樹研究所 (福島市飯坂町))

ア 果実肥大

満開後20日における「あかつき」の果実肥大は、縦径が11.8mmで平年比94%、側径が7.2mmで平年比95%と平年よりやや小さくなりました。「ゆうぞら」の果実肥大は、縦径が11.9mmで平年比97%、側径が6.8mmで平年比94%と平年並からやや小さくなりました (表1)。

イ 新梢生長

満開後20日における「あかつき」の新梢長は平年比72%と平年よりかなり短く、展葉数は平年比で103%、葉色は平年比98%と平年並でした。「ゆうぞら」の新梢長は平年比63%と平年よりかなり短く、展葉数は平年比105%、葉色は平年比97%と平年並でした (表1)

(2) りんご (農業総合センター会津地域研究所 (会津坂下町))

「ふじ」の満開は、4月22日で平年より12日早くなりました (表2)。

表1 ももの生育状況 (農業総合センター果樹研究所)

果実肥大	縦径 (mm)				横径 (mm)				側径 (mm)			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	11.8	12.6	13.5	94	8.2	9.0	9.5	91	7.2	7.6	8.1	95
ゆうぞら	11.9	12.3	12.4	97	8.0	8.6	8.1	93	6.8	7.2	6.6	94

新梢生長	新梢長 (cm)				展葉数				葉色 (SPAD)			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	1.3	1.8	1.2	72	7.7	7.5	7.7	103	41.5	42.2	43.4	98
ゆうぞら	1.5	2.4	1.9	63	8.1	7.7	8.0	105	40.4	41.8	41.2	97

注) 平年は1996~2025年の平均値

表2 りんごの開花および満開状況 (農業総合センター会津地域研究所)

樹種	品種	開花観測日			満開観測日		
		本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
りんご	ふじ	4月19日	4月30日	4月26日	4月22日	5月4日	5月1日

注) 平年は1996~2025年の平均値。

4 発育予測 (果樹研究所：5月1日現在、会津地域研究所：4月30日現在)

仙台管区気象台が4月30日に発表した1か月予報 (5月2日~6月1日) では、今後の気温は平年より高く推移すると見込まれます。

果樹研究所における、もも「はつひめ」の硬核期開始日は、気象庁の予報を反映した予測では6月4日ごろで平年より5日早い見込みです(表3)。また、収穫開始日は6月30日ごろで平年より5日早く、収穫盛期日は7月4日ごろで平年より4日早いと予測されます(表3)。

もも「あかつき」の硬核期開始日は、気象庁の予報を反映した予測では6月2日ごろで平年より5日早い見込みです(表4)。また、収穫開始日は7月25日ごろで平年より4日早く、収穫盛期日は7月28日ごろで平年より4日早いと予測されます(表4)。

なお、今後の気温が2℃高く経過した場合は、「はつひめ」、「あかつき」ともに平年に比べて6～8日生育が早まると予想されるので、今後の気象予報に留意する必要があります。

会津地域研究所(会津坂下町)における果樹の生育は、気象庁の予報を反映した予測では、かき「会津身不知」の開花が5月31日ごろで平年より3日早いと予測されます(表5)。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右され、今後の気温の推移により大きく変動することがあるため注意が必要です。

表3 もも「はつひめ」の発育予測日 [予測方法: 発育速度(DVR)モデルによる発育予測]

	観測日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		2℃高い	平年並	2℃低い
硬核期開始日	6月7日	6月9日	6月4日	6月1日	6月4日	6月8日
収穫開始日	6月30日	7月5日	6月30日	6月28日	6月30日	7月3日
収穫盛期日	7月4日	7月8日	7月4日	7月2日	7月4日	7月7日

注1) 平年は2010～2025年の平均値。

注2) 気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3～4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) もも「はつひめ」の発育予測は1～2日の誤差があることに留意する。

表4 もも「あかつき」の発育予測日 [予測方法: 発育速度(DVR)モデルによる発育予測]

	観測日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		2℃高い	平年並	2℃低い
硬核期開始日	6月5日	6月7日	6月2日	5月30日	6月2日	6月6日
収穫開始日	7月25日	7月29日	7月25日	7月21日	7月25日	7月29日
収穫盛期日	7月29日	8月1日	7月28日	7月25日	7月28日	8月2日

注1) 平年は1996～2025年の平均値。

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3～4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) もも「あかつき」の発育予測は1～2日の誤差があることに留意する。

表5 発育予測日 [予測方法: 発育速度(DVR)モデルによる発育予測]

	開花日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		2℃高い	平年並	2℃低い
会津身不知	6月5日	6月3日	5月31日	5月28日	6月2日	6月8日

注1) 平年は1996～2025年の平均値

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3～4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) 発育予測は2～3日の誤差を生じる場合があることに留意する。

5 栽培上の留意点

(1) 防霜対策

幼果期は耐凍性が最も弱く、凍霜害の危険性が高くなるので、気象情報に十分注意し、防霜対策を徹底しましょう。

最新の情報は、福島地方気象台ホームページ「2週間気温予報」や「霜と気温の見通し」を御確認ください。

「2週間気温予報」 : <https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/>

「霜と気温の見通し」 : <https://www.jma-net.go.jp/fukushima/shimo/shimo.html>

現在の果樹の生育は、ぶどうを除き、各樹種ともに平年より6～9日程度早まっています。

生育ステージごとの安全限界温度を下回る温度に遭遇するおそれがある場合には、速やかに防霜対策を実施しましょう。

各樹種の生育ステージ別安全限界温度は、農業振興課ホームページの技術資料「作物別凍霜害及びひょう害技術対策（令和8年3月13日一部修正）」を参照してください。

URL <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/nogyo-nousin-gijyutu03.html#kisyou>

事前対策としては、防霜資材を準備するとともに、地温の上昇を図るため下草は5cm程度に刈り込みましょう。なお、空気や土壌が乾燥している場合は適宜かん水を実施し、土壌水分を確保しましょう（乾燥条件は気温の低下が著しいため）。

また、降霜被害が見られた場合は、被害状況を確認の上、人工受粉を徹底し結実確保を図りましょう。

(2) もも

新梢や果実の生育が旺盛な時期に入るので、着果管理や土壌の水管理等を徹底し、新梢および果実の初期生育を促進しましょう。

ア 予備摘果

摘らいや摘花を実施しなかった場合や、摘らい程度が弱く着果量が多い場合は予備摘果を実施しましょう。なお、品種により、着果量が少ない場合は、仕上げ摘果から実施しましょう。

イ 仕上げ摘果

仕上げ摘果は、果実肥大に差がつく満開後40日頃から実施し、硬核期開始日頃までを目安に実施しましょう。

摘果の程度は最終着果量の1～2割増しとし、樹勢や双胚果、核障害の発生を見ながら加減しましょう。

(3) なし

ア 予備摘果

予備摘果は満開後30日以内に終了するように努めましょう。

イ 新梢管理

芽かきは、予備摘果と同時に行い、主枝や垂主枝の背面枝はかき取りましょう。不定芽新梢が混み合っている部位は芽かきで2～3本に整理し、適度に間引きを実施しましょう。予備枝は、風により新梢が折損するおそれが無くなったなら先端新梢を1本に整理しましょう。

ウ 樹勢回復対策

土壌が乾燥している場合は、樹勢低下や土壌中のカルシウムの吸収不良による生理障害の発生が懸念されるため、かん水により土壌水分を確保しましょう。

平年より新梢伸長が不良で葉色が薄い場合には、早期に摘果を行い、着果量を制限しましょう。

また、必要に応じて、5月中を目安に窒素成分を含む葉面散布剤を使用しましょう。

(4) りんご

ア 予備摘果

予備摘果は結実が明らかになりしだい開始し、満開後30日以内に終了するように努めましょう。原則として中心果を残し、着果量の多い樹や樹勢の弱い樹から摘果を行いましょう。

結実が良好な園地では、長果枝や葉の少ない果そう及び肥大不良の果そうの果実は摘除し、着果負荷の軽減を図りましょう。また、えき芽果の着生が多い園地では、早めに摘除しましょう。

なお、予備摘果の際に果柄を取り除くと腐らん病の予防に効果的です。

イ 新梢管理

予備摘果と平行して、主枝や骨格枝の背面、切り口等の不定芽から発生している新梢をかき取りましょう。

ウ 土壌管理

この時期に土壌が乾燥している場合は、樹勢低下やカルシウムの吸収不良による生理障害の発生が懸念されるため、かん水により土壌水分を十分に確保しましょう。

(5) ブドウ

ア 長梢せん定の芽かき

「巨峰」等の4倍体品種における無核栽培では、やや強めの新梢を確保することに心がけましょう。1回目は展葉2～3枚時に副芽や極端に強い新梢を取り除きます。なお、晩霜害の危険がある場合は副芽の芽かきは次回に行います。2回目は新梢の生育差が明らかになる展葉6～8枚時に誘引作業と併せて行いましょう。新梢が混み合っている部分や、弱い新梢を中心に切り除きましょう。

イ 短梢せん定の芽かき

1回目は、展葉2～3枚時に、副芽や極端に勢力が強いものを取り除きましょう。また、主枝延長枝では先端の特に出る芽を取り除きます。2回目は展葉6～8枚時に花穂の良否を確認して行いましょう。第1芽、第2芽ともに同じような勢力の新梢が発生している場合は、なるべく基部の新梢を利用します。

6 病虫害防除上の留意点

現在の果樹の生育は、平年より6～9日早まっています。また、4月は平年よりも降雨が少なく経過しましたが、今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがあります。気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょう。また、耕種的防除を徹底し、発生密度の低減を図りましょう。

(1) 病害

ア リンゴ黒星病

本病の重要な防除時期は展葉期から落花20日後ごろです。昨年、本病の発生が認められた園地では、落花直後の防除は、効果の高いDMI剤（県病虫害防除指針参照）を十分量散布して被害防止に努めましょう。

イ リンゴ褐斑病

本病は開花期にも感染リスクがあり（令和6年度参考となる成果）、果樹研究所における本病の子のう胞子の初飛散は4月24日（果樹研究所内の「ふじ」の満開は4月19日）に確認されています。例年本病の発生が多い場合には、落花直後および落花2週間後にデランフロアブル1,000倍を使用しましょう。

ウ モモせん孔細菌病

病虫害防除所による4月下旬の調査では、春型枝病斑が確認されていません（令和8年4月30日付け防除情報）が、5月に降雨が多い場合は、感染が急激に増加するおそれがあるため注意が必要です。

本病は、発生初期の密度抑制が重要なため、定期的にはほ場を巡回し、伝染源である春型枝病斑の早期発見とせん除を徹底し、感染防止を図りましょう。 なお、春型枝病斑のせん除は、発病部位が残らないように病斑部の周辺を含めて可能な限り基部から切り戻しましょう（図1）。 また、樹冠上部での発生を見逃さないように注意し、直下への被害拡大を防止しましょう（図2）。

春型枝病斑の発生は長期間にわたるため、せん除は定期的に複数回実施しましょう。

薬剤防除は、降雨前の予防散布を基本に10日間隔で実施しましょう。ICジンク水和剤を組み入れた防除体系によって本病の被害を軽減できることが明らかになっているため（令和6年度普及に移しうる成果）、落花10日後にICジンク水和剤1,000倍を使用し、被害防止に努めましょう。

なお、銅水和剤（クプロシールド）を使用する際は、薬害の発生を軽減するため、炭酸カルシウム水和剤（クレフノン100倍）を、必ずバケツ等で一次希釈を十分に行ってから加用しましょう。 また、薬剤が沈殿しないように攪拌しながら散布を行いましょう。 高温時の使用や連用は、薬害が発生しやすくなるおそれがあるため避けましょう。

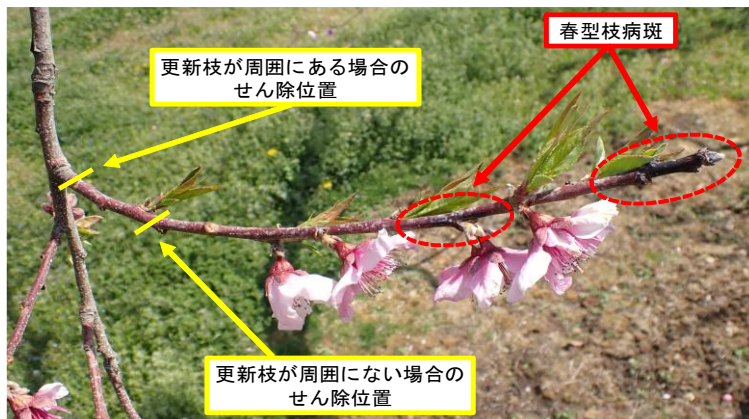


図1 春型枝病斑のせん除位置

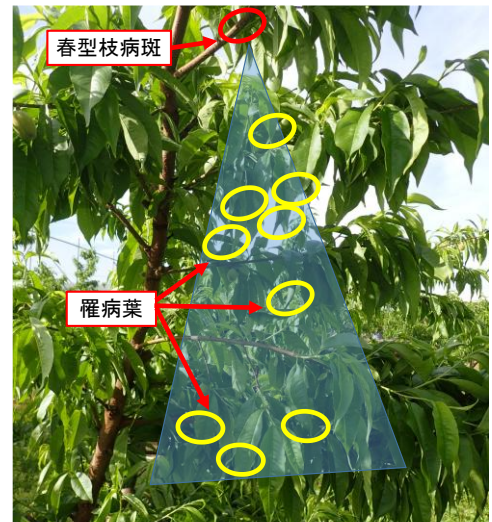


図2 春型枝病斑とその直下での新梢葉での発病

エ モモうどんこ病

例年本病（「毛じヤケ」を含む）の発生が多い場合には、落花 10 日後ごろにトリフミン水和剤 1,500 倍を使用しましょう。

オ モモ灰星病

花腐れは果実への伝染源となるため、花の枯死やヤニの噴出を目印にして、見つけしだいせん除しましょう。せん除した枝は必ず園外に持ち出し、菌密度の低下に努めましょう。

本病は、ももの他、おうとう、すもも、あんずに発生します。園地周辺の花腐れの発生にも注意し、被害の拡大を防止しましょう。

カ ナシ黒星病

病害虫防除所による4月中旬の調査では、芽基部病斑の発生は場割合は平年並でした（令和8年4月30日付け令和8年度病害虫発生予察情報発生予報第2号）。果樹研究所では、本病の初発生は4月28日に確認されています。今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがあるため注意が必要です。

花そう基部に発病している場合は、りん片が脱落せずに付着しているため、見つけしだい除去して適切に処分しましょう（図3）。

オ ブドウ黒とう病・ブドウ晩腐病

展葉5～6枚期はこれら2つの病害の防除時期となるため、本病に有効な薬剤を使用して初期の感染を防止しましょう。例年ブドウ黒とう病の発生が多い園地では効果のある薬剤を選択して使用しましょう。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

ミツバチ等を導入している園地では、巣箱回収後に第1世代幼虫を対象とした防除を速やかに行いましょう。越冬世代の誘殺盛期は4月3半旬と推定されました。第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合には、5月5半旬ごろと予測され、第2世代幼虫の防除適期は5月6半旬ごろと推定されます（表6）。

イ ハマキムシ類

リンゴモンハマキの越冬世代誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合には、5月3半旬ごろと予測され、第1世代幼虫の防除適期は5月5半旬ごろと推定され、リンゴコカクモンハ

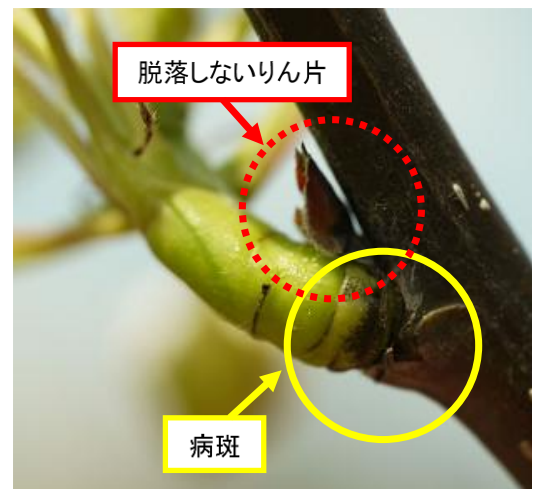


図3 ナシ黒星病の花（果）そう基部（芽基部）病斑の発見の目安

マキもこれに準じると考えられます（表6）。昨年、本種の発生が多かった園地や、現在、花や新葉に食害が見られる園地では、ミツバチ等の巣箱回収後、りんごでは落花直後、なしでは落花1週間後に本種に登録のある殺虫剤を使用しましょう。

また、複合交信かく乱剤はハマキムシ類の越冬世代成虫発生初期に設置することが有効であるため、遅れないように設置しましょう。

ウ カイガラムシ類

ウメシロカイガラムシ第1世代のふ化開始は、気温が2℃高く推移した場合、5月1半旬頃と予測され、防除適期は5月2半旬頃と推定されます（表7）。クワシロカイガラムシの防除適期はウメシロカイガラムシより5～10日程度遅くなります。カイガラムシ類はふ化定着初期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除しましょう。

エ カメムシ類

越冬世代成虫による被害は幼果の段階から発生する場合があります。山間部や山沿いの園地では、カメムシ類の飛来状況をよく観察し、集団的な飛来を確認した場合には速やかに防除を行いましょう。

表6 果樹研究所における防除時期の推定（令和8年4月30日現在）

今後の気温予測	モモハモグリガ		リンゴモンハマキ	
	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	越冬世代 誘殺盛期	第1世代 防除適期
2℃高い	5月24日	5月30日	5月11日	5月24日
平年並み	5月29日	6月4日	5月14日	5月29日
2℃低い	6月5日	6月12日	5月19日	6月5日

起算日：モモハモグリガ4月14日、リンゴモンハマキ3月1日（演算方法は三角法）

表7 果樹研究所における防除時期の推定（令和8年4月30日現在）

今後の気温予測	ウメシロカイガラムシ	
	第1世代 ふ化開始	第1世代 ふ化盛期
2℃高い	5月5日	5月8日
平年並	5月8日	5月11日
2℃低い	5月12日	5月17日

起算日：1月1日（演算方法は平均法）

～ 令和9年産用の貯蔵花粉を確保しましょう ～

- 令和9年産の果実生産に向け、**自家採取等による花粉の確保**に努めてください。
- 未使用花粉は、シリカゲル等を入れた保存容器に密封して**乾燥状態を保ち、令和9年産用の貯蔵花粉として、冷凍庫(-20℃以下)に適切に保管**しましょう。

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344
(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>